

## 複数の介助者への在宅血液透析（HHD）指導を通して

### ～HHD 移行までの経過～

長崎腎クリニック 長崎腎病院

○永野かおり 丸山祐子 橋口純一郎 船越哲

#### 【目的】

今回、主となる介助者の他にサポートとして複数設定し、介助者の精神的負担を軽減することで HHD へ移行する事が出来た一例を報告する。

#### 【症例・経過】

58 歳女性、透析歴 18 年。透析中の同姿勢苦痛と自由な時間が欲しいと HHD を希望。介助者の夫は仕事で時間を拘束される事が多く、娘達の協力であった。当初反対していた娘達が両親の強い思いに共感し同意した為、介助者 3 人への教育指導を開始した。講義は介助者 3 名が同時に来院する時に実施。実技は個別に指導。移行日が近づくと不安が多く聞かれ、家族間の心理的な調整の必要性が判明した。その都度傾聴し、家族間で協議し解決していった。長女からは「一人じゃないから安心」という言葉も聞かれ、HHD 導入に至った。

#### 【考察】

HHD は患者のライフスタイルに合わせて行える治療法であるが、介助者の負担も多くなる。今回の事例は介助者が複数いることで、それぞれの精神的負担が減り、家族で協力することによる安心感や連帯感が HHD 移行に繋がったと考える。また、指導するだけでなく、家族間の関係性も関わってくるため、十分なケアと傾聴が重要である事を再認識した。

#### 【結語】

介助者を複数設定することで HHD 移行を拡大出来る可能性がある。